

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530611

研究課題名（和文）超高齢期の心理的適応モデルとしての老年的超越の解明と測定尺度の開発

研究課題名（英文）Investigation of theory of gerotranscendence and scale development as an indicator for the psychological adaptation in oldest old.

研究代表者

権藤 恭之（GONDO YASUYUKI）

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：40250196

研究成果の概要：本研究は、虚弱が進行する超高齢期の心理的適応モデルとしての老年的超越の概念構造の解明と測定尺度の開発を行うこと目的とした。まず、超高齢者に対する質的なインタビューを実施し、老年的超越を測定する質問紙を作成した。つぎに、若年高齢者および超高齢者を対象に調査実施し「ありがたさ」「おかげ」の認識、内向性、二元論からの脱却、宗教的もしくはスピリチュアルな態度、社会的自己からの解放、基本的で生得的な肯定感、利他性、無為自然と命名された 8 因子からなる尺度を作成した。最後に、身体機能、精神的健康と尺度の関係を分析し、老年的超越の特徴の一部は虚弱超高期における喪失から生じる、心理的 well-being の低下を緩衝する可能性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：老年的超越(gerotranscendence)、心理的 well-being、虚弱、超高齢者(85 歳以上)

1. 研究開始当初の背景

(1)現在、80 歳から 85 歳以上の超高齢期と呼ばれる年齢層の人口が急増している。こうした超高齢者人口の増加も背景に、高齢者の心理的発達に再び注目を集めている。

(2)中でも、スウェーデンの Tornstam が提唱した老年的超越(gerotranscendence)理論は、これまでのサクセスフルエイジング像とは異なる発達像を示す理論として関心を持たれて

いる。また、近年では、老年的超越理論に関する実証研究も増加している。

(3)老年的超越は虚弱な超高齢者の心理的 well-being の維持向上の面からも注目されている。虚弱な超高齢者の心理的適応に関して、Joan Erikson（以下、Erikson と称する）は、Erikson の 8 段階からなる心理社会的発達段階理論を延長した第 9 段階の心理的発達の可能性を論じている。そして、この第 9 段階の

心理的発達で示される特性として、先述の老年的超越の可能性を論じている。

(4)しかし、Erikson が想定した超高齢期における虚弱高齢者の心理的適応という観点から、老年的超越の役割を検討した研究は今のところない。

2. 研究の目的

(1)本研究では、虚弱が進行する超高齢期の心理的適応モデルとしての老年的超越の概念構造の解明と測定尺度の開発を行うこと目的とした。老年的超越の測定については Tornstam が測定尺度を開発しているが、予備研究の結果、老年的超越の諸特徴の内容やその表出には文化差が大きいことが示された。そこで、研究1として日本の高齢者において示される老年的超越の諸特徴を検討するため、超高齢者に対する老年的超越に関するインタビューにおいて示された特徴から質問項目を作成し、新たな日本版老年的超越尺度を開発した。

(2)研究2として作成された老年的超越尺度の虚弱超高齢者における心理的 well-being との関連性及び、老年的超越の諸特徴の中でもどのような特徴が心理的 well-being に関連するのかを検討した。特に、高次生活機能が低下しているが心理的 well-being が高い超高齢者群と心理的 well-being が低い超高齢者群の老年的超越の諸特徴の相違を検討した。

3. 研究の方法

(1) 研究1:日本版老年的超越質問項目の作成にあたり、東京都および秋田県に在住の高齢者20名に半構造化面接調査を行った。適格基準は以下の通りであった。①85歳以上である。②身体機能が低下している (Barthel Index \leq 90、老研式活動能力指標 $<$ 10、疾患有り、要介護認定有り)。③認知機能が維持されている (MMSE \geq 21)。また、主観的幸福感が維持されている者だけでなく、対照群として主観的幸福感が低下している者も選定した (主観的健康感、PGC モラール・スケール)。

なお、インタビューガイドは老年的超越理論の提唱者 Tornstam (1997) が作成したものを、許可を得て使用し、老年的超越の3つの側面における各徴候を説明する文章を読み、対象者がその徴候を認識しているかを尋ねた。インタビュー内容は IC レコーダーから逐語録を作成し、質的分析を行った。本研究では、質的分析法の中で、特定の状況や特定の対象者の経験を記述するのに適した方法である現象学アプローチ、既存の理論を比較するの

に適した方法である継続的比較法を採用し、それらの手順に従った

①まず、インタビュー内容を何回か読み返した。②次に、各対象者の発言から意味内容が似たものをまとめ、テーマを抽出していった。③対象者間でテーマを比較し、意味内容が似たものを主要なテーマとした。④さらに、老年的超越と関連するテーマと抽出された主要なテーマを比較し、意味内容が類似あるいは共通するようにテーマを分けた。⑤比較ができない、独自の意味内容のテーマについては独立したテーマとしてまとめた。

これらの手順を経て、老年的超越の構成概念を記述し、各要素に関連する質問文を作成した。

尺度の作成は、65歳以上の在宅高齢者500名を対象に実施した調査を用いた。これらの参加者は、訪問調査と郵送調査という2つの調査方法により集められた。訪問調査は、85歳以上超高齢者に実施した。一方、郵送調査は主に前期・後期高齢者に実施した。

(2)研究2: 85歳以上超高齢者を対象に訪問調査を実施した。

質問内容は心理的 well-being を抑うつ状態、健康度自己評価、主観的幸福感の3つから評価した。抑うつ状態については Geriatric Depression Scale 5項目版(GDS-5)により評価を行った。健康度自己評価は「健康だ」「まあ健康だ」「あまり健康ではない」「健康でない」の1項目4段階で評価した。主観的幸福感は PGC モラール・スケール日本語版を用い、総得点および下位尺度「老いに対する態度」「孤独感・不満感のなさ」「心理的安定」の得点を求めた。

高次生活機能の評価には老研式活動能力指標を用いた。また、超高齢者への訪問調査では日常生活動作能力 (Activities of Daily Living : ADL) を、バーセル指標を用いて評価した。また、介護保険の要介護認定を受けているかどうか、受けている場合には要介護度を尋ねた。

人口学変数として、年齢、性別、同居形態、学歴を用いた。また、訪問調査では、認知機能を Mini-Mental State Examination (MMSE) を用いて評価した。また、現在治療中の疾患の有無について、治療中の疾患があるかを尋ねた。さらに、外出頻度について、1週間あたりの外出回数を尋ねた。

(3)本研究は東京都老人総合研究所の倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

(1)老年的超越の構成概念を、次の3つの各側面について、Tornstam(1997)と類似する5つの

徴候と、新たに1つの徴候を記述した。

第一に、宇宙的側面においては、「回想」「世代間のつながり」「生と死の連続性」「生きる不思議」「生きる喜び」「霊的な存在」を記述した。「回想」は、過去をよく思い出すという徴候である。ただし、先行研究とは異なり、時間・空間の超越は認められなかった。「世代間のつながり」は、過去と未来の世代とのつながりを認識し、生命の永続性を感じるという徴候である。「生と死の連続性」では、死に対する恐怖が減少し、死が生の一部であると認識する。「生きる不思議」では、生きていることが不思議だと認識する。さらに、「生きる喜び」では、日常的な習慣に喜びを見出し、歌、俳句、絵画など、ささやかな楽しみを持つ。最後に、「霊的な存在」は、死者の魂や神仏などの霊的な存在を認識するようになるという徴候である。Tornstam(1997)には見られず、理論上、老年的超越は霊的な意味合いを持たないとされる。

第二に、自己の側面においては、先行研究とほぼ一致する結果が得られ、「自己との対面」「自己中心性の減少」「身体の超越」「自己の超越」「自我の統合」「自己からの離脱」を記述した。「自己との対面」は、自分の気付かなかった、良い面や悪い面に気付くという徴候である。次に、「自己中心性の減少」は、自己中心的でなくなるという徴候である。「身体の超越」では、加齢に伴う身体機能の変化、病気や障害を深刻に認識しなくなる。さらに、食事や睡眠などの生理的感覚に喜びを感じる。「自己の超越」は、利他性を認識し、他者に共感しやすくなるという徴候である。そして、「自我の統合」では、過去と現在を肯定する。最後に、「自己からの離脱」は、状況から自己を引き離すだけでなく、自分自身から自己を引き離すという徴候である。しかし、Tornstam(1997)には見られず、自己の超越との差異も明確ではない。

第三に、個人的・社会的関係の側面においては、「社会関係の意味の変化」「役割からの離脱」「無垢の現れ」「物質的価値の低下」「知恵の超越」「相互依存的自立」を記述した。「社会関係の意味の変化」では、新たな人間関係を求めず、身近な人間関係に満足する。つまり、一人であることを肯定する。「役割からの離脱」は、自己を抑圧する役割から離脱するという徴候である。次に、「無垢の現れ」では、人目を気にせず、あるがままの自己でいられる。「物質的価値の低下」は、財産、外出などの物質的価値に対する欲求が低下し、必要以上の財産や物質を求めないという徴候である。さらに、「知恵の超越」では、物事には善悪両面があることを認識し、他者への助言を控える。最後に、「相互依存的自立」は、自立の定義が変化し、相互依存性を認識するという徴候である。ただし、

Tornstam(1997)にはこの徴候は見られなかった。

上述の徴候における先行研究との相違の一部は、文化的要因の影響だと推察される。例えば、宇宙的超越で記述された「霊的な存在」は、宗教・信仰の影響によるかもしれない。自己の側面及び個人的・社会的関係の側面における徴候についても、何らかの文化的要因が関連していると考えれば、今後、日本の文化に固有の徴候を記述し、老年的超越の文化固有の要素と普遍的な要素とを区別することが求められる。したがって、日本の異なる地域で調査を行い、下位文化間での比較を行うことも重要だろう。また、国外の異文化間での比較も有効だと考えられる。

以上のインタビュー内容の発言から Tornstam の老年的超越の特徴と類似した発言、および、対象者の適応にとって重要であると判断された発言を抽出し、41個の質問項目を作成した。

日本版老年的超越質問紙の因子構造を検討するため、全41項目を用いた主因子法による探索的因子分析を行い、8因子を抽出した。因子1は4項目から構成され、「ありがたさ」や「おかげ」という自己の存在が他者により支えられているという認識を示しており、『「ありがたさ」「おかげ」の認識』と命名した。因子2は、4項目から構成され、一人であることのよい面を認識する、孤独感を感じない、外側の世界からの刺激がなくとも肯定的態度でいられるといった Jung の内向性の特徴を示しているため、「内向性」と命名した。因子3は4項目から構成され、善悪、正誤、生死、現在過去という概念対立の無効性や対立の解消を示す項目であるため、「二元論からの脱却」と命名した。因子4は3項目から構成され、神仏の存在や死後の世界、生かされている感じなど、宗教的またはスピリチュアルな内容であったため、「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」と命名した。因子5は3項目から構成され、見栄や自己主張、自己のこだわりの維持など社会に対する自己主張の低下を示しているため、「社会的自己からの解放」と命名した。因子6は4項目から構成され、自己に対する肯定的な評価やポジティブな感情を示す項目が多かった。また、「食べるのが楽しい」という生得的な欲求を肯定する面もあるため、「基本的で生得的な肯定感」と命名した。因子7は3項目から構成され、自己中心的な傾向から他者を重んじる傾向への変化を示していたため「利他性」と命名した。因子8は4項目から構成され、「考えない」「気にならない」「無理しない」といったあるがままの状態を受け入れる傾向を示していると考えられたため「無為自然」と命名した。

(2)研究2として、特に、超高齢者において老年的超越尺度と心理的 Well-being の関係を検討した。まず高次生活機能が低下しても well-being を高く維持する超高齢者を抽出するために、超高齢者訪問調査の参加者を、高次生活機能と心理的 well-being の高さによって分類した。参加者 155 名中、GDS-5、健康度自己評価、PGC 総得点、老研式活動能力指標合計点に欠損のない 149 名を、これらの変数を用いて SPSS の大規模ファイルのクラスター分析により分類した。クラスター数を 3 にした場合、参加者は、高次生活機能は低いが心理的 well-being の指標が全般的に高いクラスター1、高次生活機能が低く心理的 well-being の指標が全般的に低いクラスター2、そして高次生活機能と心理的 well-being の指標が共に高いクラスター3 の 3 群に分類された。日本版老年的超越質問紙の下位因子ごとの項目の合計点について、検定の結果、低機能高 well-being 群は低機能低 well-being 群よりも有意に 内向性、社会的自己からの解放、無為自然の得点が高く、宗教的もしくはスピリチュアルな態度の得点が低いことが示された。

(3)本研究の目的は、Erikson の虚弱超高齢者の心理的適応に関する仮説を基に、身体機能や高次生活機能が低下しているが心理的 well-being を高く維持する老年的超越尺度を作成することであった。インタビューおよび調査の結果から 8 因子から構成される尺度を作成することができた。しかし、8 因子中 7 因子において項目間の内的一貫性は十分に高くなかったため、質問紙の信頼性については疑問が残る。しかし、抽出された因子の内容が妥当なものであることから考えると一定の評価ができよう。加えて、日本における老年的超越概念の測定についての研究は、先行する研究がほとんどないことや、Tornstam の尺度の日本語訳版をそのまま用いることの問題も指摘されている。より安定的に老年的超越の特徴を測定するために、因子ごとの項目を増加させて尺度構成を行うなど、更なる検討が必要である。

次に、低機能高 well-being 群では低機能低 well-being 群よりも、日本版老年的超越質問紙を用いて測定された 8 つの特徴のうち、3 つの特徴 (内向性、社会的自己からの解放、無為自然) が高く、一部の老年的超越の特徴は身体機能や高次生活機能の低下時に生じる心理的 well-being の低下を緩衝することが示唆された。しかし、老年的超越の特徴の 1 つである宗教的もしくはスピリチュアルな態度については、低機能低 well-being 群の方が高く、つまり心理的 well-being の維持とは負の関係を示し、仮説とは異なる結果を示した。

(11)本研究で用いた超高齢者集団は、410 名と小規模な特定地域からの悉皆サンプルである。そのため、超高齢者の代表サンプルとして十分であるかは論議の余地がある。しかし、本研究参加者の基本的属性、身体機能の状態、主観的幸福感などについては、本研究と同様の手法で異なる都市部の地域で行った超高齢者調査とほぼ同じであり、都市部の超高齢者としてはこれまで報告されてきた集団とほぼ同質であると考えられる。したがって、本研究の見聞も一定の範囲で信頼できるものと言えるだろう。

本研究の研究デザインは横断的であるため、今回の結果から直ちに「老年的超越により虚弱超高齢者の心理的 well-being 低下が緩衝された」という因果関係的な解釈を行うことには慎重を要する。ただし、低機能高 well-being 群は低機能低 well-being 群よりも現疾患に罹患してからの平均期間が長かった (低機能高 well-being 群 10.9 年、低機能低 well-being 群 3.1 年)。このことは、長い罹患期間を経て、老年的超越の特徴を獲得し、低下した心理的 well-being が回復するという、Erikson の第 9 段階の仮説で述べられた適応過程の存在の可能性を示すものである。今後は、縦断的デザインを用いて、疾病の罹患時期や身体機能や高次生活機能の低下時期も考慮し、超高齢者における各種機能の低下や周辺環境の変化の過程とそれに対抗する心理的適応の過程の関係、そして、その過程の中での老年的超越の獲得について検討を行う必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① Iwasa, H. Gondo, Y. Yoshida, Y. Kwon, J. Inagaki, H. Kawaai, C. Masui, Y. Kim, H. Yoshida, H. Suzuki, T. Personality and participation in mass health checkups among Japanese community-dwelling elderly Journal of Psychosomatic Research 66(2)155-159 (2009) (査読有)
- ② 針金まゆみ、河合千恵子、増井幸恵、岩佐一、稲垣宏樹、権藤恭之、小川まどか、鈴木隆雄 老年期における死に対する態度尺度 (DAP) 短縮版の信頼性ならびに妥当性 厚生指標、56 (1) 33 - 38 (2009)(査読有)
- ③ 伊集院睦雄、本間昭、川合嘉子、今井幸充、権藤恭之 軽度アルツハイマー型認知症例に対する MIS (Memory Impairment Screen) の適用可能性 老年精神医学雑

- 誌 19(12)1349-1356(2009) (査読有)
- ④ Ijuin, M., Homma, A., Mimura, M., Kitamura, S., Kawai, Y., Imai, Y., Gondo, Y. Validation of the 7-Minute Screen for the detection of early-stage Alzheimer's disease. *Dement Geriatr Cogn Disord* 25, 248-55, (2008) (査読有)
- ⑤ Iwasa, H., Gondo, Y., Yoshida, Y., Kwon, J., Inagaki, H., Kawaai, C., Masui, Y., Kim, H., Yoshida, H., Suzuki, T. Cognitive performance as a predictor of functional decline among the non-disabled elderly dwelling in a Japanese community: a 4-year population-based prospective cohort study. *Arch Gerontol Geriatr* 47(1): 139-149, (2008). (査読有)
- ⑥ Iwasa, H., Masui, Y., Gondo, Y., Inagaki, H., Kawaai, C., Suzuki, T. Personality and all-cause mortality among older adults dwelling in a Japanese community: a five-year population-based prospective cohort study. *Am J Geriatr Psychiatry* 16, 399-405, (2008) (査読有)
- ⑦ Shimizu K., Hirose N., Takayama M., Arai Y., Gondo Y., Ebihara Y., Yamamura K., Nakazawa S., Inagaki H., Masui Y., Kitagawa K. Relationship between physical and cognitive function, blood pressure and serum lipid concentration in centenarians. *Geriatrics & Gerontology International*, 8(4), 300-302, (2008) (査読有)
- ⑧ Arai Y., Takayama M., Gondo Y., Inagaki H., Yamamura K., Nakazawa S., Kojima T., Ebihara Y., Shimizu K., Masui Y., Kitagawa K., Takebayashi T., Hirose N. Adipose endocrine function, insulin-like growth factor-1 axis, and exceptional survival beyond 100 years of age. *J Gerontol A Biol Sci Med Sci*; 63(11):1209-18, (2008) (査読有)
- ⑨ 権藤恭之: 百寿者研究の現状と展望. *老年社会科学* 28(4):504-512, (2007) (査読無)
- ⑩ 呉田陽一、権藤恭之、稲垣宏樹、伏見貴夫、佐久間尚子、本間昭 日本語版 Alzheimer's Disease Assessment Scale(ADAS-J cog.)「単語記憶課題拡張版」の信頼性の検討. *老年精神医学雑誌* 18(4): 417-425, (2007) (査読有)
- ⑪ 岩佐一、権藤恭之、増井幸恵、稲垣宏樹、河合千恵子、大塚理加、小川まどか、高山緑、藺牟田洋美、鈴木隆雄 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年者を対象とした検討 *厚生学の指標* 54(6): 26-33, (2007) (査読有)
- ⑫ 岩佐一、権藤恭之、増井幸恵、稲垣宏樹・河合千恵子、大塚理加、小川まどか、高山緑・藺牟田洋美、鈴木隆雄、日本語版「WHO-5 こころの健康状態表」の信頼性ならびに妥当性—地域高齢者を対象とした検討— *厚生学の指標* 54(8): 48-55, (2007) (査読有)
- ⑬ 小川まどか、権藤恭之、増井幸恵、岩佐一、河合千恵子、稲垣宏樹、長田久雄、鈴木隆雄、地域高齢者を対象とした心理的・社会的・身体的側面からの類型化の試み. *老年社会科学* 30(1): 3-14, (2007)(査読有)
- [学会発表] (計 8 件)
- ① 増井幸恵 Eriksonの第 9 段階理論の日本における適用可能性 日本心理学会 72 回大会, 札幌, 2008.9.19-21
- ② 北川公路, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 権藤恭之 百寿者の認知機能とADLの追跡調査 東京百寿者研究から 日本心理学会 72 回大会, 札幌, 2008.9.19-21.
- ③ Masui, Y., Gondo, Y., Inagaki, H., and Hirose, N. Do personality characteristics predict longevity?: Findings from the Tokyo Centenarian Study. Georgia Centenarian anniversary symposium, Atlanta, 2008.8.13-15
- ④ 島内晶, 佐藤眞一, 権藤恭之, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 広瀬信義 百寿者介護へのソーシャル・サポート 三者モデルからの考察 第 50 回日本老年社会学会大会, 堺, 2008.6.28-29
- ⑤ 清水健一郎, 広瀬信義, 権藤恭之, 稲垣宏樹, 増井幸恵, 新井康通, 高山美智代, 中澤進, 海老原良典, 山村憲 百寿者の予後予測因子としての性格の意義 第 50 回老年医学会学術集会, 千葉, 2008.6.19-21
- ⑥ 新井康通, 高山美智代, 中澤進, 清水健一郎, 山村憲, 海老原良典, 権藤恭之, 稲垣宏樹, 増井幸恵, 広瀬信義 百寿者の生命予後と血清insulin-like growth factor 1 濃度の関連 第 50 回老年医学会学術集会, 千葉, 2008.6.19-21
- ⑦ Ogawa, M., Gondo, Y., Masui, Y., Iwasa, H., Kawaai, C., Inagaki, H., Osada, H. and Suzuki, T. : Wholistic classification of elderly by psychological, physical and social functions. 2007.11.16-20, *The Gerontologist*, 47 special issue1, pp.811, The Gerontological Society of America, San Francisco, CA (2007)
- ⑧ 片桐恵子, 権藤恭之, 増井幸恵, 稲垣宏樹, 岩佐一, 河合千恵子, 小川まどか, 鈴木隆雄: 職業からの引退が夫婦関係に及ぼす影響—縦断データによる検討—. 第 49 回日本老年社会学会大会, 札幌市教育文化会館 (2007) .

[図書] (計4件)

- ① 権藤恭之、朝倉書店、高齢者心理学 編著 (2008)
- ② 権藤恭之、北大路書房 ヒトのエイジングの認知心理学における構成概念としての処理速度の役割 エイジング心理学ハンドブック (2008)
- ③ 権藤恭之、短期記憶・ワーキングメモリ、記憶の生涯発達心理学. 北大路書房: 282-294. (2008)
- ④ Gondo, Y., Poon, L.W. Springer、 Cognitive Function of Centenarians and its Influence on Longevity. Annual Review of Gerontology and Geriatrics, Biopsychosocial Approaches to Longevity. 27: 129-149. (2007)

6. 研究組織

(1)研究代表者

権藤 恭之 (GONDO YASUYUKI)
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号: 40250196

(2)研究分担者

高橋 龍太郎 (TAKAHASHI RYUTARO)
財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究部長
研究者番号: 20150881

増井 幸恵 (MASUI YUKIE)
財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究員
研究者番号: 10415507

河合 千恵子 (KAWAI CHIEKO)
財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団・東京都老人総合研究所・研究員
研究者番号: 00142646

呉田 陽一 (KURETA YOICHI)
昭和大学・富士吉田教育部・講師
研究者番号: 60321874